錬金術師は今日も行く　～番外編～

心眼の虎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
錬金術師は今日も行く　～番外編～

【Ｎコード】
Ｎ５５７０ＢＡ

【作者名】
心眼の虎

【あらすじ】
「錬金術師は今日も行く」を元にした思いつきのテキトーなネタを掲載してい来ます。
※多分カオスなネタ多めです

ヴァルキリーロワイヤル（前書き）

ども、心眼です。
章編集していたらなんかめんどくさくなったので番外編と本編で分けることにしました。
ご了承ください。

ヴァルキリーロワイヤル

「ここは・・・一体・・・？」
気が付くと真っ白な部屋の中にいた。
あれ？　さっきまで確か俺は部屋で新作ゲームをしてたはず・・・。
なのに何でこんなところに・・・？
「よぉ、気づいたか」
「お前はっ！？」
急に俺の目の前に現れたのは、この小説の作者≪心眼の虎≫。
・・・おい、何で作者が小説内に出てきてんだよ。
「とりあえず聞くが、ここは一体どこなんだ？」
「ここか？　ここは俺が望む物は何でも出てくる空間、通称≪ザ・わぁるど≫だ」
「何でそんな所に俺を？」
「あー、それはちょっと決め事をしたくてな」
「決め事？」
「ああ、とても重要なことだ」
重要なことだと？
「それは一体・・・？」
心眼は少し悩む素振りをするとこう告げた。
「実は先日気が付いたんだが・・・この小説は・・・メインヒロインがまだ決まってなかったんだ・・・」
・・・・・・・・・・・・・。
「っえええええええええええ！？」
マジでかああああああああ！？
「決まってないってどういうことだよ！！」
「それはだな・・・この話ってもともとは≪錬金術師の話≫じゃなくて≪最強高校生の話≫だったって知ってるだろ？」

「まぁ、そのことは主人公として一応知っているが・・・」
「で、錬金術師の話になった時に生まれたのがコルリなんだよ」
「それはそうだろうな」
「元々は京子がメインヒロインだったんだけど、急遽話が変わったせい色々とごちゃごちゃになって誰がメインヒロインなのかうやむやになっちまってな」
「おいおい、そんなので大丈夫なのか？」
「大丈夫だ、多分問題ない」
本当に大丈夫なのかよ・・・。
「それで、今から何をするんだ？」
「よくぞそれを聞いてくれたな！！」
心眼がそう言うと部屋が急に広くなり、地面から台が生えてきた。
しかも何かが乗って――武器・・・だと！？
「おい、お前今から何をする気だ」
「ただのバトルロイヤルですが何か？」
ただのバトルロイヤルですが何か？って、おい・・・。
「それで・・・俺は誰と戦えばいいんだ？」
俺は数ある武器のうちの一つを手に取り、素振りを始める。
「戦うのはお前じゃない」
「それはどういうことなんだ？」
「カモーン！！　ヒロイン達！！」
そう心眼が言うと何の前触れもなく壁にドアが現れた。
「ここはどこなのでしょうか・・・？」
「コルリ！？」
「マスター？」
「コルリちゃん、どうかしたの？」
ドアの中からコルリが出てきたかと思うと京子の顔が現れ、香苗姉さん、浅瀬川姉妹、明道先輩、白羽と原野先輩と卜部先輩と沙希さんと鬼気・斑・古刀と、次々に見覚えのある顔が現れた。
「えーと、これはどういう事なんだ？」

「そこにある武器で理解しろ！！」
理解って言われてもなぁ・・・
まぁ、こいつの考えてることは大体わかるケド。
「要するにこいつらが戦い合うと・・・」
「ザッツライト！！」
まぁ、多分この話で誰かが死ぬことはないと思うから大丈夫だと思うけど、不安だ・・・。
特に京子が。
「なんかいっぱい武器が置かれてるね。コルリちゃん、これはなんて言うの？」
「それはモーニングスターですね」
「どうやって使うの？」
「それは殴るために使います」
「痛そうだね～」
あいつは絶対に戦わせちゃ駄目だあああああああ！！
て言うかあいつ以外の全員猛者すぎるだろ！！
「さあ、みんな好きな武器を取ってくれ！！」
武器を取れだと！？
「私はこのトンファーでいきます」
トンファーあるの！？
最初からマニアックな武器出してきたなぁ！！
「コルリちゃんにトンファー取られちゃった・・・それなら私はこのチャクラムでいこうかな？」
チャクラムキターーーーーーー！！
ってマニアック過ぎるにもほどがあるわっ！！
チャクラムって聞いてすぐにそれが分かる人は少ねぇよ！！
「このクナイは良いものだね～」
「この双振りの刀・・・なかなかしっくりきます」
「私はスタッフにしよっと。魔法少女っぽい？」
「私はロッドで・・・魔女みたいですかね？」

「儂は金棒にしようかのぅ？　鬼と言えばやっぱり金棒じゃろ」
「私はカギ爪にします、私自身の武器も爪ですしね」
「あたいはこの太刀にするよ、でも、刀が刀を使うってのはなんか変な感じがするねえ」
おおぅ・・・こいつらはまだ妥当な方だな。
全員とも自分の専用武器っぽいけど。
「この勝負、勝たせてもらおうかしらね？」
第二人格キターーーーーーーーーー！！
やっちまったよこの人！！
よりによって鞭選んじゃったよ！！
人格変わると分かっておきながらやっちゃったよ！！
絶対に確信犯だよ！！
「やはりメイドはナイフですよね？」
その組み合わせはやばくね？
なんか某同人ゲーのＰＡＤ長を彷彿させ━
「！？」
急に背筋に悪寒が走った。
なんか・・・どこからか殺気が・・・・。
「私は・・・釘バットかな？」
なぜに釘バット！？
パン屋なのになんで釘バット！？
てか釘バットがあったってことにビックリだわ！！
「じゃあ、私は・・・これにしよっと」
お、おい京子・・・それは・・・包丁じゃねえか！？
何で人斬り包丁じゃなくて普通の包丁があるんだよ！？
「フフフフフフフフフフ・・・」
ヤンデレとして覚醒したーーーーーーーー！？
「さて、武器も選び終わったようだしルール説明といこうかー」
こいつ・・・完全にツッコミ放棄してやがる！！
「今から始まる祭りの名はバトルロワイヤル！！　さっき選んだ武

器で相手を行動不能にして最後まで立っていた者が勝者だ！！　誰かと組むのもあり、単独で戦うのもありのルール無制限の大☆乱☆闘！！」
「バトルロワイヤル・・・良い響きね」
そこの第二人格者うるさい。
「それで・・・戦うにしても私たちに何か利があるのかしら？」
「おおっと！？　よくぞ聞いてくれたな卜部　紗枝！！」
「なんで私の名を・・・と言うか貴方は何者なのかしら？」
そう言えば俺とコルリはあらすじで心眼に以前会ったことあるけど、他のみんなは知らないんだったな。
「俺か？　俺はこの小説の作者！！　言うなれば神！！」
「なんですって？」
「俺にかかればこの世界を滅ぼすくらい朝飯前だぜ！！」
なんかもしかしたらこいつがラスボスなんじゃゃね？って思えてきた。
でも、作者がラスボスってのはもしかしたら面白いかもしれない・・・絶対に勝てないだろうけどな。
「それで今回のバトルロワイヤルを勝ち抜いたものにはなんと！！メインヒロインの座をくれてやるぅー、もってけ泥棒！！」
「「「「「「「「「「えええええ！？」」」」」」」」」」
うん、まぁ普通驚きますよね。
「・・・この小説のメインヒロインは決まってなかったのですね、心眼様」
「はっはっは、だから今回決めようって事なんだよ」
おいおい、メインヒロインを決めるのにそんなに軽くていいのかよ。
「えーと、とりあえずバトルロワイヤルをするには人数が多いから、まずはくじ引きで三手に分かれてもらう」
そう言ってどこからかお手製のわりばしくじを取り出した。

この世界はお前が望むものを何でも出せるんじゃねぇのかよ。
何でよりによって一番手の込んでないのを出すんだよ。
「割りばしの先が赤いのが出た人はそこの赤いゲートを、先が黒いのが出た人はそっちの黒いゲートの方を、白が出た人はあっちのゲートをくぐって奥にある部屋に行ってくれ」
心眼がそう言うとまた何の前触れもなく赤と黒と白のゲートが壁に現れる。
・・・番外編だからって自由すぎるだろ、すこしは自重しろ。
「さてと、全員のくじ引きも終わったし俺たちも移動するか」
そう言って心眼がいつ間にか現れた階段に上って行ったので俺は遅れないようについて行った。
そしてその先に広がっていたのは、まるでコロッセオの様な闘技場。
「何突っ立ってんだ？　早く座れよ」
「お、おぅ」
俺は少し驚きながらも心眼の隣に座ると、さっきから気になっていたことを尋ねてみた。
「なぁ、一つ聞いていいか？」
「ん、なんだ？」
「コルリと京子とメルシーのメインヒロインっぽい三人はこの戦いに出るのは分かるんだが、その他の明らかにサブキャラの位置のやつらはなんでここにいるんだ？」
「そりゃ、その三人の引き立て役ってやつさ」
「でもサブキャラが勝ったらどうするんだ？」
「奴らが勝つことは絶対にない」
「なんでそう言えるんだ？」
「奴らの勝ちフラグはすでに俺がへし折ったからな」
こいつフラグをへし折りやがったー！？
作者ってそんなことも出来るのかよ！？
「それって八百長じゃね？」

「否、神の決定と言ってくれ」
まぁ間違ってはいないが・・・今からメインヒロインの座のために戦おうとするサブヒロインズが可哀そう過ぎるだろ。
「さて、まずは黒チームの試合だな、実況解説員よろしくぅ！！」
実況解説員だと！？　俺たちのほかにも誰かここに来てんの！？
「あーあー、てすてすなのじゃ」
突然スピーカーから聞き覚えのある声と語尾が聞こえてくる。
「本日このばとるろわいやるの実況をさせてもらう迦具土じゃ」
何で迦具土がこんなところに居んの！？
「そしてその補佐をさせてもらう郷　正也だ」
正也も！？
しかも何で二人ともノリノリ！？
「さて、黒ちぃむの出場者は京子・鬼気・小波・卜部とやら達じゃ、皆の者正々堂々戦うのじゃぞ」
「ヤンデレ化した京子に第二人格の卜部先輩のカードが揃うとは・・・これは面白そうな戦いになりそうだな」
第二人格化した先輩は強くなっていると思うけど、京子はヤンデレ化しても戦闘力は変わらないと思うんだけどな。
まぁ正也の言う通り面白い戦いになりそうだけどな！！
「それにしても・・・何故我はこの戦いに参加できない所じゃ？」
それは神様が出たら勝負にならないからって言う心眼の配慮じゃ・・・？
「実は素で忘れてた」
「マジでかっ！？」
衝撃の真実がっ！？
って作者がキャラを忘れてたら駄目だろ！！
「まだこの話の設計段階で気が付いたから良かったけれど、あのまま忘れてたら危なかった・・・」
本当にスゲーぎりぎりで思い出したんだな・・・。
「・・・もしかしたら本編で出てたのにここじゃ出てない奴がいる

かもしれない」
「そう言えば・・・誰かいない気が・・・」
なーんか忘れてる気がする・・・。
ま、いいか。
「あーなんか戦闘見るの面倒だから決勝戦にスキップしてもいい？」
「スキップできんの！？」
本当にもぉ・・・めちゃくちゃ過ぎんだろぉ・・・。
「早送りいいいいい！！　ぶるぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

≪早送り≫

「さぁ、次はいよいよ決勝戦じゃ！！」
「えーと、決勝戦の出場者は京子・コルリ・メルシーの三人だ。と言うか、俺要る？」
おぉう！？　なんかもう決勝戦まで来てる！？
「ふむ、やはり残ったのはあの三人か」
だろうな！！
お前がサブヒロイン共のフラグ折ったからこの結果は目に見えてたわ！！
「さぁ、今猛者たちを倒した乙女たちが戦場へと立つ！！」
「ただリングに入っただけだけどな」
中央には京子・コルリ・メルシが立っている。
あとなんか武器が強化されてるんだけど、特に京子の包丁には血糊がべったりついてんだけど。
ああ・・・どんどん京子がヤンデレに・・・。

カァン！！

どこからか急にゴングが鳴った！？
「さぁ、始まったのじゃ決勝戦！！」

ああ、あれが始まりの合図だったのか・・・ってプロレスか！！
「実はこの始まりの合図をゴングにするかドラにするか作者は迷ったらしいぞ」
そんなどうでもいい裏情報なんて要らんわっ！！
「どうでもいい情報を言ってるうちに何か決着が着いておるぞ？」
「ええっ！？」
中央のリングには倒れているコルリとメルシーが。
えーと・・・何があったの？
「どうやら二人とも血糊に足を滑らせてこけて気絶してしまったみたいじゃの」
決勝戦なのにそんな落ちかよ！！
「と言うわけで表彰式をするから皆の者は中央に集まるのじゃ」
迦具土がそう言うと中央に一位だけの表彰台がたけのこのごとく生えてきた。
なんかもうこういうことには慣れたわ。

そして中央へ移動━

「バトルロワイヤルを制したのはこの猛者の中でも最弱だと思われた狭川　京子だぁ！！」
「ど、どもー」
「いやー、見事な病みっぷりだったな」
「えへへ・・・」
そこは照れるところじゃねぇぞ。
それと包丁置いてこいよ。
「さて、勝者への今回のご褒美は・・・」
そう言ってまた割りばしくじを引く。
あれ？　景品はメインヒロインの座じゃ・・・しかも今回って？
「じゃん！！　えーと何々？　≪主人公とのキス≫だとよ、いきなり良いのを引いちまったな」

「え、ええ～！？」
「ちょっと待て」
「ん？　どうした？」
「景品って何？　しかも今回ってのはどういうことだ？」
そう言って俺は心眼の頭をわし掴む。
「痛いもげる痛いもげる痛いもげる、てか話すから離せ」
俺は仕方なく手を放す。
「さて、話してもらおうか」
警察ドラマによくある取り調べの様に心眼に言う。
「景品ってのは副賞で今回ってのは言葉通り次回もあるってことだ」
「ちょおおおおおお！？　次回って何！？」
「そりゃ後々出てくるヒロイン達が不利だからに決まってんじゃん」
「お前どんだけヒロイン出す気なんだよ！？　今でもかなり居るのに何でさらに増やすの！？」
「そりゃ、俺は修羅場が好きだからなっ！！」
こいつ最悪だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！
「さて、副賞のキスをさっさとしちまいなよｙｏｕ」
「おまっ！？　絶対にキスなんてしないからな！？」
「・・・謙斗は私とキスしたくないの？」
そんな顔でそんなこと言われたらキスするしかなくなるじゃねぇかよ！？
「くっ・・・しょうがない」
表彰台の上に乗っている京子は俺と同じくらいの目線に居る。
少し前へ出れば唇が重なるくらい近くにいる。
「え、えと・・・初めてをもらってくだひゃいっ！？」

ツルッ

ゴスッ

・・・京子がこけた。
自分の包丁についていた血糊に足を取られて、コルリやメルシーみたいにこけて頭から落ちて気絶しやがった。
「・・・ここまでは作者の俺も予想出来なかった」
「ああ、俺も予想できなかった」
「あー・・・なんだ、落ちとしては微妙だったからあとはお前が締めろ」
そう心眼が言うと俺は急に眠気に襲われ、目の前が真っ暗になった。
目を開けると・・・。
「夢落ちかよ!?」
ゲーム機を持ちながら寝ていた俺がいた。
そんな落ちかよ!?

・・・・・あけましておめでとうございます。
あとなんかすいません・・・・。

ヴァルキリーロワイヤル（後書き）

番外編なのでメタ発言多いです。
あと誰か忘れている気がするんですけど思い出せません。
まぁ、今更どーでもいいですけど。

あとこの小説は一月一日に掲載された小説です。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5570ba/

錬金術師は今日も行く　～番外編～

2012年1月15日04時54分発行